
メイドインドラゴン

瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドインドラゴン

【Nコード】

N 8 7 3 4 A

【作者名】

瑠璃

【あらすじ】

僕の名前はトリツシュ。通称、竜の巣窟と呼ばれるアララック山の中腹にある洞窟に住んでいる銀竜（ ）である。さて、僕はいつも英雄気取りの人間たち相手に暇つぶしをしていたけど、それも飽き飽きしていたところになんかちょっとした面白い人間がやって来る。だけど、その人間はすでに

序章（前書き）

人間に擬態したドラゴンが巻き起こすドタバタコメディーでもっと考えたので投稿しますw

ああ、掛け持ちだなあゝ……つと、がんばります^^；

さて、バイトも掛け持ちなんで更新遅れ気味になるかもです><

序章

その実を一口食せば、例え不治の病であろうとも完治してしまう、という嘘か誠か、その真偽さえも分からない伝説の果実　ネクタリ
ア　を求めて毎日のように欲望に駆られた冒険者なんて呼ばれる人間がやって来る最近、竜族の巣窟と言われるアララック山に、僕
シルバードラゴン
銀竜のトリッシュは飽き飽きしていた。
ま、そんな時だったかな。

天空で燦々と太陽が輝く昼間であつても凍え死ぬような極寒地でもあるアララック山に“面白い人間”がやって来たのは

その面白い人間というのは、人間の貴族等に使える使用人の娘
メイドと呼ばれているようだが……。

さて、その娘と出逢つた時、すでに凍え死んだ後であつた。が、
遺書のようなものを持ち合わせていたので僕は読んでみることにする。

僕の住処であるアララック山には、英雄気取りでやって来る人間
が絶えない。

まあ、そんな英雄気取りの人間たちが僕やその友人と対峙し、八
つ裂きに遭い果てた骸とともに残された品物の中に含まれていた事
典とやらのおかげで、僕には人間の言葉を理解し、彼らが使う文字
についても理解していたので気軽に読むことができた。

「もし私になにかあつたらお願い！　クレス様に　ネクタリア　を
！　クレス様は不治の病にかかられ余命が一年もないのです！」

どうやら、この娘、不治の病に侵される主人のために　ネクタリ
ア　を求めて、ここへやって来たようだ。

ふむ、健気な話だ。

「なあ、暇つぶしも兼ねて、その遺書に書いてあるクレスって人間にネクタリアを届けてやらんか？」

さてさて、僕と一緒に、凍え死んだメイド娘が所持していた遺書の内容を読んだ友人である銀竜のシリスが、そんな話を持ちかけるのだった。

「それもいいね。人間社会ってやつをいつか見聞していたところだったし。」

とまあ、そんなこんなで僕は軽い気持ちでシリスが持ちかけた話に乗るのだった。

第一話「人間になってみる?」 Act 1 (前書き)

一話に付き、 Act 1 } 10くらいで分ける予定です^^;

第一話「人間になってみる？」 Act 1

ふう、人間たちは古の昔から勘違いしているんだなあ、これが……。

僕らドラゴンの叡智は神々にも勝るとも劣らぬとか、竜語魔法なんて人間たちが使う黒魔術、白魔術などなどの魔法や魔術を遥に凌駕するようなものを使える、とか……。

その前に僕らだって、この世に生を受けた時は当然、無知である。まあ、無知で凶暴で獣そのものな一生送る連中も中にはいるんだけどねえ……。

そんな僕らドラゴンが知識を得る方法のひとつが“人間を食らうこと”である。

聖書という人間たちの間で信仰されている宗教の教書の中に記されている“知恵の果実”という代物は、僕らドラゴンにとっては人間たちである、というわけだ。

さて、“知恵を得る”ということは善悪を知ることである。

僕もそれを知ったが故に悩んでしまった。

ま、善悪を知るっていう楽しみもあるんだろうねえ……。

「ねえ、上手く擬態できているかな？」

「とりあえずOKだね。しかし、何故、あの娘の姿に擬態するんだ？」

「んー、そうだねえ、あの娘の姿が僕にとっての理想の姿ってところだろうか？ ああ、年齢とか若干違うように擬態してみたけど、それはそれでいいかなあ……」

「ふーん、まあいいや。それじゃ、しばらくこの町をうろついてみ

「ようや」

僕　銀竜のトリツシユは親友である銀竜のシリスとともに、僕らの住处であるアララック山の麓にあるカイザリアという町へとやって来ていた。

あゝ、とりあえず人間の姿に擬態してね。そうじゃないと騒ぎにだらうだろし。

カイザリアの町は、僕の住处であり、通称、ドラゴン族の巣窟、竜の楽園などと呼ばれているアララック山へと挑む冒険者と自称する命知らずの人間たちが造り上げた町である。

ああ、そうそう。“勇者”、“英雄”なんて人間たちの間で呼ばれているような人物が何人もアララック山で遭難……いやいや、多分、僕らドラゴン族に戦いを挑み敗れ去り、斃れた者もけっこういるらしい。

僕も数人、そんな人間を食らった経験がある。

まあ、なんだ……そんな連中の遺品を求めてやって来る人間も多いつてわけ。

それはともかく。

「んゝ、ガラス戸とやらに映る人間になった自分の姿……。なかなかイイ感じだなあ」

僕は　ルルノア酒場　という小汚い字で書きなぐった看板が掲げてある一軒の店の出入り口のガラス戸に映った自分の姿をジッとしばらくの間、見つめるのだった。

第一話「人間になってみる？」 Act 2（前書き）

人間に擬態したドラゴンは他にも登場予定です^^

第一話「人間になつてみる？」 Act 2

第一話「人間になつてみる？」 Act 2

ルルノア酒場 という酒場の出入り口のガラス戸には、貴族とかいう人間の金持ちなんかに使えているメイドの格好をした漆黒の艶のある長い髪を吹き抜けるそよ風になびかせる女性にしては少し背が高くなつて思う人間年齢20代半ばの若い女の姿が映り込む。当然、それは僕だ。

ああ、それと僕自身は眠気なんてちつとも感じちゃいないところなんだけど、目の前のガラス戸に映る人間の女の姿に擬態した僕の容姿……主に容貌は、どことなく眠気に襲われているようなタレた目尻が特徴的であつた。

まあ、なにはともあれ、容姿端麗で魅惑的、そんな言葉が似合うかな。

「ふむ、まあいい感じだねえ」

僕のニタニタと微笑んだ顔がガラス戸に映り込む。

さてと、容姿端麗、才色兼備、こんな言葉が良く似合っているなあ……つと、自分自身で思つてしまふような自身の姿に僕は思わず惚れ惚れする。

「おいおい、そんな姿じゃダメだ、ダメだ！ その前に俺様の姿を見習うだな！」

僕が擬態した人間の姿についてシリスがチツチツと舌打ちをし、右手の人差し指を横に何度か振りながら意見を言ってくる。

「ふむ、お前さんを見覚えか……。しかし、何故、人間の子供の姿なんぞに？」

僕はちよいと不思議な気分でシリスを見つめる。

あ、シリスだけど、紺色の背広と半ズボンという格好をした人間年齢10歳かそこの小柄な男の子の姿に擬態している。んで、見

た感じは背が低く、ちょっと気弱そうな感じがするけど、その貌には、如何にも“自分は凄いいぞ！”と自慢しているかのように思える自信が彩った笑みが浮かんでいる。

ついでに、人間の姿に擬態した僕とシリスの容姿なんかを見比べると、年の離れた姉弟、もしくは母親と子供という感じた。

それはいいとしてだ。

「ん、そうだな。俺様が子供好きってこと……。ま、それは今はいいや。とりあえず、その酒場ン中にでも入ってみようや」

「うん、そうだねえ……」

となんだかんだと、僕とシリスは ルルノア酒場 って店の店内へと足を踏み入れるのだった。

人間たちは、この世界をヴァルレナスと呼んでいるようだ。

んで、そんなヴァルレナス最大の大陸であるフォノン大陸の東に辺境に僕の住処であるアラック山とその麓にあるカイザリアの町があるってわけだ。

ま、それはともかく。

「うゝむ、なんだか如何にも殺気を放っていきそうな強面の人間がいて、うばいだなあ……」

眉をひそめながら、ぐるりと自分の周りを見渡すシリスがつぶやく。

「確かに……」

僕はそんなシリスに対し、ウンウンと何度か頷いてみせる。

さて、僕とシリスが訪れた ルルノア酒場 って場所だけど、どうやら冒険者と自称する人間の溜まり場のようなのである。ま、そんなわけで冒険者と自称しているような人間がたくさん集まってワイワイガヤガヤと騒いでいる。

煙草を口にくわえながら仲間の冒険者数人となにかしらの作戦でも練っている最中と思われる背中に大きな剣を背負った大柄の男、

せつせと愛用のライフル銃の整備に勤しむ女銃士などなど、冒険者と呼ばれる人間たちの姿が、僕の眼には新鮮に見える。

ふう、まあ、なにはともあれ……。僕の住处であり、僕らドラゴン族の群生地であるアララック山へと臨むつもりなんだろうな、こいつら……。まったく命つてものを大事にしるよ、と悲哀を感じながら、ここ ルルノア酒場 に集まっている冒険者たちを僕は順に見回すのだった。

「おい、コラ！ なに見てやがるんだ！」

さて、ひとりの男が、茹蛸のような真っ赤な顔をしながら、そんな僕に因縁をつけてくる。

多分、酔っ払いだろうなあ、こいつ……。やれやれ……。

「ん、見ちゃ悪いのかな？ ……っと、ウザイよ、茹蛸男！」

と、僕に成り代わるようにシリスが挑発的な言葉を言い放つ。

第一話「人間になってみる？」 Act 3（前書き）

ファンタジーな物語もいいですね W

第一話「人間になってみる？」 Act 3

第一話「人間になってみる？」 Act 3

「ふん、生意気な小僧だ！ さて、ここは女子供が来るようなところじゃねえんだよ！ さつさとお家へ帰りな、オラア！」

僕に視線の先には、如何にも短気で単純、そしてなにからなにまで性質の悪い男の姿ある。

んで、そんな言葉がよく似合う男は、シリスの挑発にあっさりと乗り、酔っ払って茹蛸のように紅潮している無精髭が目立つ小汚い顔、そして頭髮が絶滅してツルツルテカテカの脂ぎったスキンヘッドの天辺までさらに真っ赤に紅潮させる。

聞き流せばいいものを。ホントに単純だねえ……っと、僕はクク、と喉の奥で笑う。

さて、こんな人間を観察するという楽しみを知った瞬間でもあったわけだ。

「あらあら、人を見かけだけで判断するなんて軽率だねえ、おぢさん」

ニタニタと笑いながらシリスは、両手を腰の後ろに回した形で茹蛸のように真っ赤な顔をした酔っ払い男の許へ近寄って、逆に絡むのだった。

ふう、こんなバカな奴は放っておけばいいものを……。まったく、お調子者だな、シリスは

「む、む、むぎぎいいい、こお、こお、小僧ああああ！」

酔っ払いはドガツと両手をテーブルに叩きつけながら、ギャオオオツと怒り狂った獣が張り上げる咆哮に似たような音程がズレまくった怒号の声を張りあげる。

単純な人間はすぐにキレル、と聞いたことがある。やっぱりその

通りだったのか、と僕は喉の奥で思わず笑うのだった。

「な、なにを笑っている！ むぎぎ、子が子なら母親もクソ生意気だぜええええ！」

「ハア！？」

笑い声が聞こえたのかな？ ま、なんだかんだと酔っ払いの怒りの矛先が僕に方へと向けられる。

その前に僕がシリスの母親だって！？ おいおい、いくら外見年齢が離れているとはいえ、そんな勝手な判断をするなよって感じた。
「ふう、勝手な物言いを……」

僕は溜息を交えながら、そうつぶやくと

「ぐおおお、我慢の限界だ！ 女子供だろうと容赦しねえええ！」

茹蛸のような顔をさらに紅潮させる酔っ払いは、脅しとばかりにボキボキと左右の拳を鳴らす。

「お、喧嘩か！？」

「おいおい、女子供相手に本気なんか出すんじゃないぞ！」

「やれやれゝ やっちゃえゝ」

なんだかんだと野次馬が集まってくる。

人間はこーゆーいざこざが始まると熱くなる性分にあるようだ。

それは男も女も関係なく。ふう、やれやれ……。

「はあ、いい加減にしろよなあ……」

ピキピキと僕の眉間が痙攣を始める。正直なところ僕は無視をし続けるほど気楽で気長、まったりと物事を見据える性分ではない。これ以上、あーでもない、こーでもない、と騒ぐようなら八つ裂きにしてやるうかな、と思う始める。

「あゝ、五月蠅いゴミだ。ギヤーギヤー騒いでるんじゃない！」

「ありやゝ」

僕と同様、まったりと物事を見据えることができない性分なシリスが、茹蛸のように紅潮した顔をさらに紅潮させる酔っ払いの無精髭で小汚い顎を目掛けてアッパーカットを打ち放つ！

「ぐえおああああ！」

ドガシャアアッ！

外見年齢10歳程度の人間の子供の姿に擬態しているとはいえ、シリスのその力はドラゴンそのものである。まあ、そんなこんなでパワーの違いを見せ付けるとばかりに、酔っ払いの身体は大きく弧を描きながら吹っ飛び頭から天井に突っ込むのだった。

さて、その刹那、野次馬たちのギャーギャー騒ぐ声がピタリと停止する。

まるで凍りついたかのように

「ちっと、やりすぎたかな……」

「恐らくね……」

シリスは鼻の頭を右手の人差し指で掻きながら、アハハ……と苦笑を浮かべるのだった。

「な、なんだ、こいつらは！？」

自称、冒険者のひとりが青ざめた顔でつぶやく。

「ほほう、なかなかじゃねえか！」

「重力操作系魔法でも使ったのかな、あのボウヤは？」

かと思えば、ニヤニヤと髭面に不敵な笑みを浮かべる男やあれは魔法だ、魔法を使ったんだ、とか思い込んでいる魔術師の女の姿も見受けられるわけだ。

ふふ、人間とは別の意味で面白い種族だな……っと、僕は思わず思ってしまう。

ん、まあ、そんな時だったかな？

「あ、見つけたわよ！ あたしを置き去りにするなんて、アンタたち外道？ 鬼畜？」

思わず耳を塞ぎたくなるような耳障りな大声が響きわたる。

「こ、この声、まさか……」

そつつぶやくシリスはササッと僕の後ろに身を隠す。

さて、その刹那、ドガガッと耳障りな物音とともに、こころルル

ノア酒場 ので出入り口の扉が開き、
これまた五月蠅い闖入者が駆
け込んでくるのだった。

第一話「人間になってみる？」 Act・4（前書き）

小説の掛け持ちって地味に大変ですね＞＜
さて、早くも新キャラ登場です^^

第一話「人間になってみる？」 Act・4

第一話「人間になってみる？」 Act・4

僕、銀竜のトリツシュの住処であるアララック山の頂には、竜王姫 という存在の住むとされる白亜の宮殿がある、と人間たちは信じている。

まあ、確かに、アララック山の頂には 竜王姫 の宮殿というか、あの御方の住処はあるんだけど……。

とりあえず、巷の人間たちが想像するような豪華絢爛な白亜の宮殿なんかないぞ！

寧ろ、観る者に戦慄を覚えさせる万魔殿と言った方が正しいかな？
さて、それはともかく。

「アンタたちいいい！ このあたしを置き去りにするなんてイイ度胸だわああ！」

黒いニットのセーターにピンクのミニスカート、白と赤のニーソックスと赤いスニーカーというラフな衣装にハート型のポーチバックを肩に下げた赤い髪の少女が、そんな大声を張り上げながら、僕とシリスの元へと突撃するような勢いで駆け寄ってくる。

ちなみに、外見年齢は17、8歳くらいだろうか？ んで、先に述べた赤い髪は長く背中まで伸びており、僕らドラゴンの飾りに付いた白いカチューシャを身につけている。

ああ、容姿は可愛い一言。だけど、短気で怒りっぽくて、そわそわとした忙しい印象も受ける。

「ひ、ひい、貴女は！？」

シリスが低く呻くような声とともにそうつぶやくと僕の後ろにサッと身を潜める。

「ふむ、まあ、とりあえず何者か分かったかな……。しかし、まあ、

何故、“姫”、貴女がこんなところに？」

と僕が少女に尋ねると、

「フツ……キミたちが“姫”に黙って“面白そうなこと”を実行しようと思んだから、彼女は怒っている、というわけさ」

フツと前髪をかき上げる黒を基調したシックなパンツスーツ姿の如何にもキザな色男って感じがする金髪碧眼の青年の姿が、いつの間にか僕の隣に見受けられる。んで、そんなキザな色男が少女の代わりとばかりに説明をする。

「ベルスウー、なんでお前さんまで……」

「フッフ、面白そうなことをやるうつていうのに、それを黙ってるなんて水臭いじゃないかって感じだねえ」

「そうそう！ズルいわよ、貴女たちいいい！」

キザな色男ことベルスは、どうやら僕とシリスがこれから実行しようかな、と計画がなにかつてことを知っているようだ。ついでに、僕が“姫”と呼ぶ少女　メデイエリスでもある。

「な、なあ、アンタたち一体、何者なんだ？」

さて、僕たちの様子をしばらくの間、傍観していたここ　ルルノア酒場　に集まっている冒険者のひとり、ゴクリと生唾を飲み込んだカタチで口火を切るのだった。

「ん、あたしたちが何者かって！？　そうね、流浪の旅人ってところかなあ　　ああ、この３人はちなみに、このあたしの従者よ。なにか文句でもある！」

ズイツと僕らは何もかと尋ねてきた冒険者の前に如何にも尊大かつ傲岸不遜な物腰で立ちはだかるメデイエリスは、キツと大きな声で言い放つのだった。

（まあ、確かに僕らは従者かもね。姫は、メリディエス様はなにせ、人間たちから（竜王姫　って呼ばれている存在だしね）

と僕は、その直後に胸中でそうつぶやくのだった。

第一話「人間になってみる？」 Act・5（前書き）

掛け持ちは大変ですね＞＜
それでもがんばってみます！

第一話「人間になつてみる？」 Act・5

第一話「人間になつてみる？」 Act・5

カイザリアの町は、そりやもう武器屋が多いのなんの……。

きつと、僕らドラゴン族の群生地であるアラック山の麓にある町つてこと警戒しているんだろうが、寧ろ人間たちは自分から危険な目に遭いやつて来ているわけである。

ま、それはそれでいいとして……。

「ところで ネクタリア をクレスつて人間に届けてやろう、なんて暇つぶしの件についてだけださ。そのクレスつて人間がどこにいるのか分かつてるのかな？」

と、メディエリス様がオレンジジュースをガブガブと飲みながら、僕らが決行しようと思んでいる暇つぶしの核となる部分についての詳細を尋ねてくる。

「ん、知らないです」

「右に同じく」

僕とシリスは、お互いの顔を見合い同時に知らない、と答える。

「な、なんですってえええ！」

知らない、と答えるとメディエリス様は、ハッと両目を見開きオレンジジュースを口から吹き出しながら、そんな大きな声を張り上げる。

「それじゃ意味ないじゃん！」

た、たしかに……。

「うゝん、とりあえず情報収集と洒落込むかい？」

フツとキザつたらしく前髪をかき上げながら、ベルスがそう言うのと、僕とシリスはほぼ同時にうんうんと2度頷く。

「んじゃ、早速……。そのアンタ！ クレスつて奴を知ってる？」

おいおい、唐突すぎじゃ……。つとばかりにメデイエリス様が、自分が座っていたカウンター席のすぐ後ろの席で食事を嗜んでいる男女に対し、傍若無人、傲岸不遜な態度で尋ねるのだった。

「な、なんだ、お前えゝ！ 知ってるわけないだろうが！」

「右に同じく……。知らないものは知らない」

男の方は一步引いたかたちで知らないと言え。その一方で女の方は我関せずって感じの答えを返す。

まあ、なんていうかメデイエリス様がなにを言おうが関わらない方が身のためかな……。

でも、“クレス”って人物に関するなにかしらの情報は欲しいところだなあ……。

「なあ、アンタら……。ここで訊くより“サルゴス”に訊いた方がいい……。って、どこへ行くんだよ！」

と、ここ ルルノア酒場 のマスターが、自分たちに訊くよりもサルゴスって人物に訊いた方が……。つと、言い終わる前にメデイエリス様は勢いよく外へと飛び出して行く。

「やれやれ、気の早いお嬢ちゃんだな。さて、アンタら……。サルゴスって奴は情報屋さ。この町のことなんなんでも知ってると思うぜ！」

ふう、と溜息をつくマスターは、首を何度か横に振りながら、“サルゴス”って人物は情報屋である、と告げる。

「なるほど、情報屋ねえ……。じゃ、とりあえず探してみるとしますかあ」

僕はペコリとマスターに一礼すると、慌てて外へと飛び出していた気の早いメデイエリス様の後を追いかけるのだった。

第一話「人間になつてみる？」 Act・6

第一話「人間になつてみる？」 Act・6

情報屋のサルゴスつて人物だけど、一癖も二癖もある人物らしい。まったく困つた人物だ。

それはメディエリス様も同じである。

ルルノア酒場 の外へと飛び出した途端、絡んできた数人に冒険者をボコボコにする有様だし……。

血の気が多いのは分かるけど、面倒事を起こされると僕らも大変だ。

冒険者の中には、“対ドラゴン装備”をしている厄介な者もいるしね。

あ、とりあえず、メディエリス様がボコつた冒険者のひとりとは、“竜斬剣”なんてモノを持っていたようだが、案の定、メディエリス様はそれを奪い取る。

それはともかく。

「サルゴスつて人間、どこにいるわけッツ！」

メディエリス様は大きな声で文句を言い放つ。

「ん、見当たりませんよね。一体、どこにいるのやら……」

僕は自分の周りを、青々と澄んだ虚空を見上げながらつぶやく。サルゴスつて人間を僕らは大体、1時間くらい探したんだけど、まったく見当たらない。

地下にでも潜伏しているのかな……。

「あのお……。誰かをお探しなんでしょうか？」

さて、そんな僕らに声をかけてくる者が現れる。

どこかお人好しっぽい感じがする瓶の底のような分厚いメガネをかけた花売りの娘だ。

「サルゴスって人間を探してるのよ！」

見当たらないからって八つ当たりは良くないよ！ そんなこんなでメデイエリス様は怒鳴る！ ふう、やれやれ……。

「はわわわあっ！」

花売りの娘はメデイエリス様が、ガーツといきなり怒鳴るものだからびつくりして尻餅をつく。

「ふう……。とりあえず僕たちは“サルゴス”って人物を探してるんだよ」

「そうそう。この町のことならなんでも知ってるって言われてる人物をな」

メデイエリス様に任せておいたら絶対にトラブルを起こすだろうな……。っと、それを見越して僕とシリスが代わりとばかりに、あわわっ〜と言いながら尻餅をついている花売りの娘に対し、改めて尋ねる“サルゴス”はどこかと
さて。

「え、ええとあ……。彼なら私の父親なんですが……」

花売りの娘はモジモジしながら、彼は自分の父親である、と言う。奇遇と言っかなんというか……。僕とシリスは顔を見合わせながら、ちよつとだけ呆然とする。

「ほう、そりや奇遇だねえ。じゃあ、案内頼むよ」

しばしば僕やシリス、そしていきなり怒鳴って花売りの娘をビツクリ仰天させたメデイエリス様の様子を静観していたベルスが、フツと前髪をかき上げ、尻餅をついている花売りに娘は抱き起こすと、
“案内を頼む”と言いながら微笑む。

「は、はい、喜んで」

イイ男には弱いとばかりに、カーツと頬を赤らめる花売りの少女は、父親であるサルゴスの許へ案内して欲しいという頼みを呆気なく承諾する。

うーん、人間の姿に擬態しているベルスは確かに色男だけど、僕はそれほど興味が……。女として感覚が狂ってるんだろっか？

それはともかく。

「さあ、行くわよ！」

メディエリス様は自分がリーダー的存在だと思い込んでいる。

まあ、僕らドラゴン族の姫君だけどさ……。

「そうですね。じゃあ、案内頼むよ」

まあ、なんだかんだと僕らは花売りの娘に誘われ、彼女の父親であるサルゴスの許へと赴くこととなるのだった。

第一話「人間になってみる？」 A c t 7（前書き）

久しぶりにこっちの方を更新しました^^

第一話「人間になつてみる？」 Act 7

第一話「人間になつてみる？」 Act 7

人間は最新情報つてものを入手しないと気が済まないらしい。

特に情報屋とかいう連中は、そんな最新情報を入手するために寝る間もを惜しんで各地に出張つていているという。

ふう、分からないものだ、人間は……。

ヴァルレナスと呼ばれるこの世界最大の大陸であるフォノンの東方は、魔境と呼んでもいいような人跡未踏の地が数多く残っている。そんな理由から一攫千金を狙つて人間たちが、そりやもう大勢やつて来るのだけど、大体が心半ばにして朽ち果てていく。ま、それだけ厳しいってわけだ。

だけど、運よく一攫千金に有りつけた人間が小規模だけど、いくつか国を建国したりしているのも事実である。

そんな小規模ながらも存在する国家のひとつミューティア王国の領土内にある町のひとつが僕の住处であるアララック山の麓にあるカイザリアの町である。

「ち、父は理由あつて身を隠している状態なんです」

どこかオドオドした感じなんだよね、この花売りの娘……。

さて、この娘の父親というのが情報屋のサルゴスだとか。

そんなサルゴスつて人間は、なにかの事情があるのか？

現在、ワケつて隠遁生活を送つているとか……。

まあ、会つてみれば分かるかな。サルゴスがどんな人間なのか

カイザリアの町の繁華街の路地裏にある今じゃ廃墟と化し、威厳とか神々しさがすっかり失われしまっている教会がある。

フォノン大陸に住んでいる者の約7割が信者だって言われているメルエディン教の教会だ。

「父はこの廃墟になった教会に隠れ住んでいます」

ちらちらと自分の周囲を忙しく見回す花売りの少女は、恐る恐る今にも壊れそうな扉を開ける。

「わ、私エリナって言います。ど、どうぞ、中へ」

花売りの少女はエリナと名乗る。んで、僕ら一行を廃墟と化した教会の中へと誘うのだった。

「ふーん、まるで廃墟のような外見と違って内側はわりと綺麗じゃない」

外見は威厳や神々しさがすっかりと消え失せたボロボロの廃墟であるが、それとは打って変わって内部は綺麗に掃除されており、廃墟と化す以前の姿をある程度だけ取り戻しているかのように思える。

ああ、そうそう教会と言えば神話で語られる英雄や聖人たちが繰り広げる奇跡の物語を語るステンドグラスや今にも天界から天使等の神々しい存在が舞い降りてきそうな祭壇などが見受けられる。

さて。

「父は地下室にいます。さあ、こちらへ……」

エリナはそう言うと、祭壇の隣にある小さく、そして古くさいが立派なパイプオルガンの鍵盤を操作する。で、操作する度に美しい音色が響きわたる。

「ねえ、あたしは別にアンタの演奏を聴きに来たわけじゃないのよ！」

メデイエリス様がブツクサと文句を言う。その次の瞬間、ガコンッ！ という鈍い音が僕らの足元から響きわたり、地下へと続く階段が出現する。

「へえ、そのパイプオルガンにそんな仕掛けがあるんだあ、凄いね

え」

あつと驚いたのかは知らないけど、シリスがニタニタと笑いながら拍手をする。

「ま、とりあえず降ってみましょう」

そう言いながら僕は、エリナと一緒に先陣を切るように地下室へと続く階段を降って行くのだった。

第一話「人間になってみる？」 Act・8

第一話「人間になってみる？」 Act・8

「ほう、あの建物は古代の霊廟かなにかだろうか……。ふふ、意外な場所を発見したものだな」

ボウツとランタンや松明など照明道具の代わりとばかりに右の手の平に光の玉を作り出し、自分の周りをぐるりと見回すベルスが、ニヤリと笑いながらつぶやく。古代の霊廟の類では、と

「恐らく地震かなにかで地下へ埋没したか、地上にあるおんぼろ教会は、“ここを隠すためのカモフラージュ”だろうか？ ま、興味はないけどね」

シリスはアクビをしながら、興味が無い、と言う。まあ、その態度から嘘を言っているようには思えないだろう。

意外と言えば意外である。まさか、僕の住処であるアララック山の麓にあるカイザリアの町の繁華街の路地裏にある一見すると廃墟としか思えないおんぼろな教会の地下には洞窟を連想させるこんな空間が存在することは意外であった。

んで、そんな洞窟を連想させる空間を抜けた先には、建物自体の規模は、それほど大きくはないが、誰だつてあつと驚くような壮麗な白亜の神殿を思わせる古代遺跡が聳え立っていたのだ！

まあ、そんな地下空間に聳え立つ古代遺跡の入り口のところに、今、僕、とりあえず人間の女性の姿に擬態しているが、その実体は銀竜であるトリッシュー行はいるわけだ。

「ふーん、住処であるアララック山の麓にこんな遺跡があつたなんて意外かもしれないね」

灯台下暗しって言葉はまさにこのことだろうか？ 僕の住処であるアララック山の麓にあるカイザリアの町の地下に、まさかこんな

遺跡があるなんてまったく知らなかったことに、正直なところ僕は驚く。

「ぐ、偶然なんです。この遺跡を見つけたのは……」

エレナは偶然だと見つけた、と言う。まあ、まさか地下にこんな壮麗な白亜の神殿があるなんて誰が思うことが……。

「父は、この神殿の奥にいます」

この地下古代遺跡の奥に、この花売りの少女エレナの父親であり、僕らが探している人物でもある情報屋のサルゴスが隠れ住んでいるようだ。

まあ、隠れるには適した場所だろう。

「ここってシルヴァーナ女王の霊廟じゃないのか？ 確か、このアラック山の麓に霊廟があった気がしたんだが……」

恐らくベルスと僕は同じく、興味はあるけど、別にどうでもいいかな、という感じである。

その一方でシリスとメディエリス様は、まったく興味がなさそうな感じだ。

それはそうと僕ら一行は、情報屋のサルゴスが隠れているという地下古代遺跡こと壮麗な白亜の神殿の内部へと、僕らは足を運ぶ。

で、シリスが四方をつまらなそうに見回しながら。シルヴァーナ女王の霊廟ではないか、と言う。

「シルヴァーナ女王の霊廟？ それより、早いとこサルゴスに会わせない！」

相変わらぬ傲岸不遜な態度のメディエリス様は、この場所がルヴァーナ女王とやらの霊廟だろうが関係ない！ さっさとサルゴスに会わせろ、とエレナを睨みつける。

「ひっ……。も、もう少し先に……。あ、あの明かりの先に……。ヒイツと悲鳴のような声を上げるエレナ。んで、僕の背中にそさくさと身を隠しながら、明かりが見受けられる深奥を指差す。

「ま、とりあえず行ってみましょうか」

どこか不満そうな表情を作り、ジツとエリナを見つめるメデイエリス様を僕はとりあえず、明かりが見受けられる深奥へと行くように促す。

「ふう、分かったよ。それが当初の目的だし」

観念したように僕を見つめるとメデイエリス様は、エリナを引き連れバタバタと響きわたるよう大きな足音を奏でながら、一足先に明かりが見受けられる深奥の部屋へと向かうのだった。

明かりが見える部屋は深奥ということで、僕らはしばらく歩くこととなる。

今にも動き出しそうな感じがするこの霊廟の守護者の巨像や被葬者であるシルヴァーナ女王とやらの生前の業績を讃える聖句や絵、それらのものを閲覧しつつ僕は、深奥を目指していると、

「ん、どうやら付けられていたようね」

メデイエリス様はそう言いながら、キツと背後を振り返る。

「ウエヘヘヘ、気付かれたみたいだな」

下品な笑い声が暗く不気味な霊廟内にこだまする。それと同時に、盗賊かなにかだろうか？ とにかく、人相の悪い男たちが物陰からスウツと姿を現す。

第一話「人間になってみる？」 Act・9

第一話「人間になってみる？」 Act・9

『シルヴァーナ女王の霊廟には近づくな！ 彼女の遺骸とともに夜空の彼方からやって来た邪悪なる神々、そして彼らの宝もそこに眠る故に』

未だに人跡未踏の魔境と呼んでもいいような場所が数多く残るフオノン大陸東方全域には、こんな伝説が残っている。

さて、この言葉は警告文と見て間違いないだろうな。

宝を欲する強欲な人間を避けるための呪いの言葉でもあるだろうな。

さて、シルヴァーナ女王とは、フオノン大陸東方初となるヴァルハリア王国という国家を生み出した人物である。

18歳で即位し、92歳で大往生するまでの74年もの間、ヴァルハリア王国という国を治めていた偉大なる女王であり、恐怖政治を行う暴君でもあったようだ。

ま、そんなシルヴァーナ女王の崩御と同時に、ヴァルハリア王国は崩壊するのだけど、その際に生前の悪行が祟ってか彼女の石像や生前の業績を讃える石碑などのほとんどが破壊されたと聞く。だけど、一部の信奉者によって莫大な財宝が秘密裏に隠されたとも言われるようだ。

その証拠とばかりに、

『私とその一行は、喜び勇んでシルヴァーナ女王が生前に貯め込んだ財宝が納められている宝物庫へと足を運ぶ。だが、そんな我々の

目の前には、なにもない空虚な空間だけが広がっているだけであった。きつと、あの浅ましい大臣のディロウら一部の信奉者の仕業である』

ヴァルハリア王国を滅ぼすこととなるゼカリアスという人物が、こんな苦言に似た言葉を残している。

後日、シルヴァーナ女王の遺体が安置されている霊廟が、彼女が生前に貯め込んだ莫大な財宝の隠し場所ではないか？ という説が有力視され、あまたの冒険者がシルヴァーナ女王の霊廟を探しに躍り上がったという。それは現在でも延々に

はあ、人間の欲深さってすごいものだなあ……。

さて、欲深い人間たちが追い求めるシルヴァーナ女王の霊廟が、まさか僕の住処であるドラゴン族の群生地であり、フォノン大陸の各地から無謀な冒険者たちが毎日のように集まってくるアララック山の麓にあるカイザリアの町の地下に埋没したいるなんて思ってもみなかったよ。

それはともかく。

「へへへ、案内ご苦労様だぜ！」

盗賊と思われる男たちのリーダー格の男……無精髭が小汚い下腹がでっぷりと膨れ上がり、今にも穿いているズボンのベルトが千切れてしまいそうなデブのオッサンは、無精髭が小汚い口許の下品な笑みを浮かべながら、案内ご苦労とか言いつつ、僕らの目の前のズイツと歩み寄ってくる。

「へへへ、俺たちや聞いてしまったのさ、たまたまなあ。お前らが情報屋のサルゴスの野郎を探しているってな！ さて、俺たちもお前らと同様、サルゴスの野郎を探していてな。まあ、そんな時にお前ら現れたつつうわけよ！ んで、後をつけてみりや伝説のシルヴァーナ女王の霊廟にたどり着く……つと、こりゃ一石二鳥だぜ！」

あゝ、はいはい、ここへやってた経緯を長々と説明、ご苦労様！ お前達がどうのこうのって経緯なんか別に聞きたくもないよ。

「へえ、そうなんだ」

僕は冷やかな視線で、盗賊共のリーダー格の男を見つめる。こいつらならず者一味も、僕らと同じく情報屋のサルゴスに用事があるらしい。まあ、こーゆー人間の考えそうなことなど手に取るように分かるんだなあ。

「どうせ儲け話を聞きだそうって魂胆なんですよ？」

さて、先手を打つようにメデイエリス様は、キツと盗賊共を睨みつけ、如何にも相手を挑発しているような傲岸不遜な態度で言い放つ。

「む、むう……。何故、分かった！」

はあ、やっぱり図星だったか……。ま、そんなわけで盗賊共のリーダー格であるデブのオッサンは、それを誤魔化すような大きな声を張り上げつつ、口許の苦笑を浮かべると、一歩後ろへと後退する。「ふん、そうだ、金儲けの話を聞き出すのが目的だ！　だが、ここを見つけたから、それは後回しだな……。今は口封じとして、テメェら一行を殺るまでのこと！」

おやおや、物騒だね。盗賊共は、そんなリーダー格の男の“口封じ”という言葉を含図に、腰から吊るしていた小剣や円月刀ショートソードシニターを勢いよく鞘から抜き、その明瞭なる殺意の込められた白刃を僕らに対し、チラつかせる。

「ふう、そーゆーものをチラつかせるってことがブチのめしてOKってことかな？」

「はあ？　なんだと、貴様あ……。ぐばべらばあ！」

奇襲というのは、まさにこーゆーことを指す言葉なんだろうか？　盗賊共のリーダー格の男の側に歩み寄った僕の右手の平手打ちが、そんなリーダー格の男の顔面に炸裂する。んで、平手打ちがクリーンヒットすると同時、元から下品で小汚い顔面の形状がさらに奇妙な形に歪むリーダー格の男は、その身体をまるで独楽が回るかのように激しく回転させながら吹っ飛ぶのだった。

「ひいっ！　親分ううう！　こ、この野郎お……。げぶはっ！」

リーダー格の男が、僕の放った右手の平手打ちによって戦闘不能になる姿を見て、その子分である数人の盗賊共は激昂し、今にも襲い掛かるうとするのだけど、これまた奇襲とばかりにメディエリス様が全員を瞬時にボコボコにぶちのめしてしまう。

「ぬ、ぬあああ、親分……。仇を討てなかったぜ……。あうう……。そうなんだか悔しそうにつぶやく盗賊共のひとり。親分思いなのか知らないけど、僕らにケンカを売ったのが間違いである。

「とりあえず、負けず嫌いのお馬鹿さんで目覚めると同時に追いかけてきたら迷惑ね。縛っておこうかしら」

そう言ってニヤリと笑うメディエリスは、どこに持ち合わせていたんだろう？ まあ、それはともかく、頑丈な荒縄で遺跡の支柱のひとつに気を失っている盗賊共を全員縛りつける。さて。

「やれやれ、無駄な時間を食ってしまったものだね。さあ、エリナとやら、改めて俺たち一行をキミのお父様であるサルゴス氏の許へ案内よろしく頼むよ」

「あ、はい……」

スツとエリナの肩に手を回すベルス。で、エリナは頬を紅潮させ、もじもじと身をよじらせながら、はい、と熱のこもった声で答える。「ふむ、心拍が異常なくらい上がっているな、あの女……。人間とは分らないもんだねえ」

チラリとエリナの方を見ながら、不思議そうにシリスがつぶやく。「まあ、いいじゃん。んじゃ、さつさとサルゴスがいる深奥へ行きましょうか」

ふう、弱いくせに邪魔者として僕らの間の割って入った盗賊共のせいで無駄な時間を食ってしまうが、もう邪魔する輩はいないだろう。そんなこんなで僕ら一行は、再びここシルヴァーナ女王の霊廟の明かりが見受けれる深奥へと向かうのだった。

第一話「人間になってみる？」 Act・10（前書き）

次回は第一話のエピローグになります！

第一話「人間になつてみる？」 Act・10

第一話「人間になつてみる？」 Act・10

ベルスとメデイエリス様が作り出した光の玉以外の光源以外に見受けられる光源、それはシルヴァーナ女王の霊廟に深奥に見受けられる明かりである。

さて、そんなシルヴァーナ女王の霊廟の深奥には、白亜の石棺が安置されている。

僕の予想が正しければ、白亜の石棺の中にはシルヴァーナ女王の遺体が眠っているはずである。
それはともかく。

「随分と豪勢な石棺なこと……」

メデイエリス様は冷ややかな声でつぶやきながら、目の前にある豪勢な白亜の石棺を見下ろす。

「天上に携帯用のガス灯が吊るしてあるのか……。明かりはそいつの光つてわけだな」

シリスが天井を見上げてつぶやく。さて、そんなシリスの視線の先には、今、僕らがいる場所　シルヴァーナ女王の遺体が納められて白亜の石棺が安置されている玄室の天井に吊るされたガス灯が見受けられる。

「ん、僕ら以外、誰も居ないようだけど？　キミの父親のサルゴスはどこにいるんだい？」

ぐるりと玄室内の全体を見て回る僕は、この玄室内にそんな僕ら以外、誰もいないことに気がつく。

「あ、あのお……」

「ん、なあに？」

さて、エリナがなんだか気まずそうな態度を見せながら、僕の右腕をぐいぐいと引っ張る。

「あ、ゴメンなさい。実は、情報屋のサルゴスっていうのは、私のことなんです！」

そんなエリナが告白する。自分が情報屋のサルゴスであると

「な、なんだってえええ！」

僕らは声をそろえる。

「ふむ、キミがサルゴスだったわけか……。しかしまあ、何故、こんな場所に俺達を連れて来たんだ？ なにか理由でもあるのかい？」
シリスは腕組をしながら、不機嫌そうに自分達をここへ連れて来た理由をエリナに尋ねる。

「あ、あのですね……。わ、私を捕まえて色々なお宝情報を聞きだそうとするアフォが多くて……。そんなわけでここを隠れ家に……。えへへ、と舌を出しながら、この場所を隠れ家に使っている理由をエリナは語る。

おいおいって感じだなあ……。

さてさて。

「ん、じゃあ、改めて……。クレスって人物がカイザリアの町に住んでるいるか否かを聞きたい」

シルスが代表して、エレナこと情報屋のサルゴスに“クレス”という人物が、カイザリアの町に住んでいるか？ それを尋ねる。

「ん、残念だけど、そんな人、カイザリアの町には……。あ、フオノン大陸東方でもっとも栄えているライディアー王国の首都アルドフェノンへ行けば……。ん、きっと、あそこなら！」

キツと僕らを順に見つめながらエレナは言う。フオノン大陸東方でもっとも栄えるライディアー王国の首都アルドフェノンへ行けば、と

「やっぱり行くべきだよねえ……」

「まあ、当初の目的だしな。クレスって人間を探すことがさ」

僕とシルスは、お互いを見合いながら、うんうん、と何度も頷く。
「あたしも、そのライディアー王国の首都アルドフェノンへ行くわよ！ もちろん、クレスって人物を探すためにね」

僕らの考えに同調するっていうか、メデイエリス様の場合は、明らかに暇つぶしのためである。まあ、それはともかく、そんなメデイエリス様は、ライディアー王国の首都アルドフェノンへ行く気満々である。

「ん、そうだね、行こう！」

当然、ベルスも賛同する。

「え、ええとお……。ライディアー王国は、この地下遺跡の地上にあるカイザリアの町からずっと西へ向かえば行けるはずですよ。あ、大体、4、5日かかる道のりですよ」

もじもじとしながらエレナは、ライディアー王国へと行く方を語る。なんだか、自分も一緒について言ってるような物腰だ。

「一緒に来たいわけ？」

ニヤリと口許に笑みを浮かべながら、そう言いつつエリナの方を振り返るメデイエリス様が、一緒に来たいのかと尋ねると、

「はい、是非是非！」

なんの躊躇もなく、エリナは一緒に行くと言えろのだった。

終章（前書き）

第一話の終章です！

近いうちに第2話をUPしますね〜

終章

終章

僕、銀竜のトリツシュ、同じく銀竜のシルスとベルス、竜王姫であるメディエリス様、そして情報屋のサルゴスことエリナ一行は、名声や多額の賞金、金銀財宝を求める冒険者と呼ばれる連中が、ある意味、無謀な挑戦としか思えない竜族の住処であるアララック山へと臨むべく集う場所、カイザリアの町を後にする。

んで、目指すはフォノン大陸東方最大の国家であるエルディアー王国首都アルドフェノン！そこに、僕らが探す人物であるクレスがいるのかもしれない。

ま、とりあえず、そんな感じで旅立つ僕ら一行は、西へ、西へと歩を進める。

「なあ、飛んで行った方が早くねえ？」

シリスがボソツと不満の言葉をもらす。

「ふふ、そうかな？ のんびりと歩きながら向かっつていうのも雅なものじゃないか」

「そ、そうか？」

ベルスはのんびりと歩いて行くことに雅を感じる、と言ってフツと前髪をかき上げる。

「ね、ねえ、飛んで行きたいって言ってるようだけど、貴女達って魔法使いの類？」

シリスとベルスの話に興味津々な様子のエリナが割ってはいる。「魔法使いねえ……。私達は、こーゆーものよ」

さて、そんなエリナを驚かせて楽しもうかと企んだメディエリス様は、ほんの一瞬だけど、真の姿であるドラゴンの姿に戻って見せる。

「ひゃ、ひゃあああああつ！」

まあ、当然の反応とばかりにエリナは、悲鳴を上げて尻餅をつくのだった。

「ふう、悪戯好きですね」

メデイエリス様のそんな行動に対し、僕は思わず苦笑を浮かべるのだった。

「ま、まあ、なにはともあれエルディアー王国首都アルドフェノンへ行きましょうか！」

とそんな僕の言葉に、みんなは『うん！』と声をそろえるのだった。

第二話「身勝手な人間達」序章（前書き）

第二話の序章をUPします！

さて、最近、mixiの自分のページの日記でも小説を連載しております！

あ、ハスターという名前ですw

もし見つけられたら、そっちの方も宜しくですw

第二話「身勝手な人間達」序章

第二話「身勝手な人間達」序章

人間達に触れ、人間社会に触れ、徐々に分かってくる連中の身勝手さ、小汚さ……。

僕は、銀竜のトリツシュは落胆する。人間って予想した以上に浅はかだなんて……。

まあ、その中には真つ当な生き方をしている人間もいるけど、クズと呼んでもいい最低最悪の人間も多々……。

でも、それが面白いのかな？ 人間として生きるのなら

僕としては人間が大好きだしね。出来ることなら、竜じゃなく人間として生まれてきたかった、なんてことも思っていたりする。

ふう、なんなんだろうな、この気分は……。複雑だなあ……。ホント……。

フォノン大陸東方最大の規模を誇る大国、エルディアー王国の首都アルドフェノンへと歩いて行く場合、いくつかの村や町を通っていかないといけない。

竜の姿に戻って空をビューンツと飛んで行けばあつと言う間なんだろうけどさ。

ま、歩いてゆく、それも面白いのかも知れない。

さて、僕らはミルトルという村へと立ち寄る。

村人の数が100人にも満たない小さな村、そしてどこか閉鎖的な雰囲気とする寂れた村である。

こーゆー村に限って裏でなにかやってるんだよなあ……って悪い予想を抱いてしまう。

例えば、邪悪な神々を崇拝する邪教団が存在していたり、邪悪な魔法使いに支配されているとか……。

うーん、悪い予想だけなら無限に思い浮かんでしまう。

それはともかく。

そんな僕　銀竜のトリッシュー行は、そこでちょっとした事件に巻き込まれるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8734a/>

メイドインドラゴン

2010年10月8日13時03分発行